



TITLE:

均田法の名稱と實態についての補足三つ

AUTHOR(S):

曾我部, 靜雄

CITATION:

曾我部, 靜雄. 均田法の名稱と實態についての補足三つ. 東洋史研究
1969, 28(2-3): 213-219

ISSUE DATE:

1969-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/152795>

RIGHT:

均田法の名稱と實態についての補足三つ

曾我部 靜雄

一 緒 言

私は本誌第二十六卷第三號に「均田法の名稱と實態について」と題する拙論を發表したところ、多少學界の注意をひいたとみて、これが内容について訊ねられることがしばしばあつて、それによつて私自身が啓發されたり、またその後の研究によつて新らしく知り得たことなどがあつて、先般の論文を若干補充する必要があるようになったから、ここにその三つ程を補足として述べることにする。

二 井田法の授田の二形式

井田法においては、國王の直轄地の方千里内の授田は、その郊と言われ、或は國中と言われ、更らには六郷の地と言われる首都を中心としてその四方百里内の地では、公田

の無い型の授田が行われ、それより外側の野と稱せられる甸（六遂）・稍・縣・都の地では、公田のある型の授田が行われることについては、既に先般の論文の中で述べたところである。この授田の二形式について、質問を受ける場合がよくあり、何故に郊と野とで異なる型の授田を行うかというのが不審になる點である。他にも同様にこの點が不分明であるとされる方々があるのではないかと思われるし、またこの形式が北齊の均田法にも影響を及ぼしていることから、先づこれから述べることにする。

この井田法で二つの型の授田が行われるのは、兵役に關係があるのである。それは周の封建制度では、その軍制は周禮の夏官司馬篇の大司馬の序に、

凡制軍、萬有二千五百人爲軍、王六軍、大國三軍、次國二軍、小國一軍、軍將皆命卿、二千有五百人爲師、

師帥皆中大夫、五百人爲_レ旅、旅帥皆下大夫、百人爲_レ卒、卒長皆上士、二十五人爲_レ兩、兩司馬皆中士、五人爲_レ伍、伍皆有_レ長、

とあつて、國王は一萬二千五百人から成る軍を六個持つことになつており、その一軍の編成は、五人の伍から始まつて、二十五人の兩、百人の卒、五百人の旅、二千五百人の師を経て、一萬二千五百人の一軍に至るのである。このような軍を國王は六箇持つのであるから、國王の有する兵員數は、總計で七萬五千人となる。この七萬五千人の兵員を、その領土の方千里内の全域に互つて徵發するかというに、そうではないのであつて、これは郊即ち六郷の地の住民のみから差出されたのである。郷は周禮の地官司徒篇の大司徒の職掌に、

令_二五家爲_レ比、使_二之相保_一、五比爲_レ閭、使_二之相受_一、四閭爲_レ族、使_二之相葬_一、五族爲_レ黨、使_二之相救_一、五黨爲_レ州、使_二之相調_一、五州爲_レ鄉、使_二之相賓_一、

とあつて、一郷は一萬二千五百家から成るが、これは二百五百家から成る州五つに分けられ、その州は五百家から成る黨五つに分けられ、その黨は百家から成る族五つに分け

られ、その族は二十五家から成る閭四つに分けられ、その閭は五家から成る比五つに分けられるという行政區劃制度が施かれていた。このような郷が郊には六箇あつた。故に郊の家の數は六郷七萬五千戸であつたわけである。この一郷の五家一比から始まる行政區劃制度が、一軍の五人一伍から始まる軍隊編成制度に移行されて、六郷から成る郊の地で、國王の六軍が編成されたのである。それは矢張り周禮の地官司徒篇の小司徒の職掌に、

乃會_二萬民之卒伍_一而用_二之_一、五人爲_レ伍、五伍爲_レ兩、四兩爲_レ卒、五卒爲_レ旅、五旅爲_レ師、五師爲_レ軍、以起_二三軍_一、旅、以作_二三田役_一、以比_二三追胥_一、以令_二三貢賦_一、とあり、この一文に對して、後漢の鄭玄は、

此皆先王所_下因_二農事_一而定_二軍令_一者也、

と註して、この制度は兵農を一致せしめるためのものであると説明し、また唐の賈公彥のこの一文に對する疏は、

小司徒佐_二大司徒_一以掌_二三六鄉_一、六軍之士、出_レ自_二三六鄉_一、故_レ預_二配_一卒伍、百人爲_レ卒、五人爲_レ伍也、而用_二之_一者、卽軍旅田役是也、五人爲_レ伍者、下文云、凡起_二三徒役_一、無_レ過_二三家人_一、六郷之内、有_二三比・閭・族・黨・州

・郷、一郷出_三一軍、六郷^{すはちち}還_三出_三六軍、今言_三五人爲_レ伍者、五家爲_レ比、家出_三一人、則是一比也、在家爲_レ比、在_レ軍爲_レ伍、伍者聚也、五伍爲_レ兩者、在_レ郷、五比爲_レ閭、閭二十五家也、在_レ軍、五伍爲_レ兩、兩二十五人也、四兩爲_レ卒者、在_レ郷、四閭爲_レ族、族百家也、在_レ軍、四兩爲_レ卒、卒百人也、五卒爲_レ旅者、在_レ郷、五族爲_レ黨、黨五百家、在_レ軍、五卒爲_レ旅、旅五百人也、五旅爲_レ師者、在_レ郷、五黨爲_レ州、州二千五百家、在_レ軍、亦五旅爲_レ師、師亦二千五百人也、五師爲_レ軍者、在_レ郷、五州爲_レ郷、郷萬二千五百家、在_レ軍、五師爲_レ軍、軍亦萬二千五百人也、以起_三軍旅_二者、謂_三征伐_二也、以作_三田役_二者、謂_三田獵役作_二、皆是也、以此_レ追胥_二者、追謂_三逐寇_二、胥謂_三伺_二捕盜賊_一、以令_三貢賦_二者、依_三郷中家數_二而施_三政令_一、以_三貢賦之事_一、

と説明している。この註及び疏の説明によって判かる如く、郷の行政區劃の一比は軍の一伍に當たり、一閭は一兩に當たり、一族は一卒に當たり、一黨は一旅に當たり、一州は一師に當たり、一郷は一軍に當たり、一家から一人づつ差出するから、一郷の一萬二千五百家を以て一萬二千五

百人の兵士からなる一軍が編成されるのであり、六郷において六軍七萬五千人の兵員が調達されるのであって、これは行政區劃が直ちに軍の編成に應用出来る兵農一致の制度である。このことは、詩經の大雅生民之什の公劉の詩の「其軍三軍」の句に對する唐の孔穎達の疏にも、

周之軍賦、皆出_三於郷_一、家出_三一人_一、故郷爲_三一軍_一、諸侯三軍出_三其三郷_二而已、其餘公邑采地、不_レ以爲_レ軍、若_三夏・殷之世_一、則通_三計一國之人_一、以爲_三軍數_一、

と言ひ、周の兵制は一郷で一軍を編成するのであるとしている。このように周の國王の率いる六軍は、天子の居るところに最も近い都城から四方百里以内の郊即ち六郷の住民によつて編成されることになつてゐた。しからばその郊の外側の野と總稱される六遂の甸の地域や公邑采地の稍・縣・都の地域の住民には、兵役の義務はなかつたかと言ふに、これ等の地域の住民にも、矢張り兵役の義務はあつた。ただ郊の地で編成される六軍が常備軍であるに對して、野では豫備軍が編成されることになつてゐた。そのことは、矢張り周禮地官司徒篇の小司徒の職掌の「乃經_三土地_一、而井_三牧其田野_一、云々」とある所の賈公彥の疏に、

凡出_レ軍之法、先_二六郷_一、賦不_レ止、次出_二六遂_一、賦猶不_レ止、徵_二兵於公邑及三等采(地)_一、賦猶不_レ止、乃徵_二兵於

諸侯、大國三軍、次國二軍、小國一軍、(下略)

と説明し、軍を出だす順序は、第一に六郷、次は六遂、その次は公邑采地、それから諸侯に及ぶとしているし、また禮記の坊記篇の「制_レ國不_レ過_二千乘_一、都城不_レ過_二百雉_一」とある所の孔穎達の疏にも「凡出_レ軍之法、郷爲_レ正、遂爲_レ副」と言い、郷のが正規軍であり、遂のは豫備軍であるとしている。

このように國王の常備軍である六軍は、郊と言われる六郷の地の住民で編成されるのであるから、郊の住民は軍務という力役に常に従事していたのである。故に公田を共同耕作するというような労働の餘裕は、豫備軍の義務しかない野の住民に比して、あまりないのである。ここを以て、六郷の郊では公田の無い井田法が行われ、その公課も十分の一税であり、これに對して野は公田のある井田法が行われて公課もやや重い九分の一税であったわけである。この兵役によつて授田の形式を異にする土地法は、井田法の原理に遵っている北齊の均田法においても行われた。北齊で

も、その授田に對して一般に兵役の義務を負わしたことは、隋書卷二十四食貨志の北齊の均田法の所に、

率以_二三十八_一受_レ田輸_二租調_一、二十充_レ兵、六十免_二力役_一、六十退_レ田免_二租調_一、

とあつて、民衆は授田にともなつて、二十歳から兵役に服するとある。しかるに北齊の天子は、別に羽林・武賁と言われる近衛兵を持っていたのであつて、この近衛兵の羽林・武賁は、魏書卷七下孝文帝本紀に、

太和十九年八月乙巳、詔 選_二天下武勇之士十五萬人_一爲_二羽林・虎賁_一、以充_二宿衛_一、

とあるのを繼承したものであらう。近衛兵即ち宿衛軍は、君主の親衛隊であるから輦轂の下に置かねばならず、ここにおいて北齊の都城の鄴の四方百里内の地では、中央の官人と共に彼等に對する公田と稱する特別な授田が行われ、普通の兵役に服する一般民衆には百里外の所で普通一般の授田が行われたのである。周の井田法における授田が、常備軍となる民衆と豫備軍となる民衆とで、百里を界として異なる形式で行われたのと全く同じである。周の井田法と北齊の均田法とで異なるのは、授田の客體が常備軍が近衛

兵となり、豫備軍が一般普通の兵となっている點にある。

三 三國志に見える課

私は先般の論文においても、晉書食貨志に見える晉の土地法の占田・課田法に現われて来る課田の課や、「女則不課」の課は、いずれも力役の意味であることを、後の制度などを證據にして述べ、また註④の所では、伊藤長胤の制度通、奥田永業の治具十三條、藤田幽谷の勸農或問などの徳川時代の學者の著書は、いずれも課や課役を以て力役と解釋していることを紹介したのである。徳川時代には、上記三先哲の著書の外にも、正司考祺の經濟問答祕録卷六の「法令考上」や、岡熊臣の兵制新書卷一中の「海内古今口數増減の大體」などは、矢張り課や課役をば力役と解釋しているのである。課に力役の意味があることは、晉書に初めてその例が現われるかと言うに、そうではないのであつて、その前の三國志に既に力役としての課の例が存在するのである。或は更らにそれ以前に溯り得るかも知れない。後漢書卷六十二の樊宏傳に「課_レ役童隸、各得_二其宜_一」とあり、この例に見える動詞として用いられた課役などは、

力役として用いられた古い例ではないかと思われるが、しかしこれは「役を童隸に課す」とも讀まれるから、力役として用いられた課の例であるとは、斷言することが出来ない。しかし三國志の場合は、明らかに課は力役の意味に用いられている。その三國志の例というのは、三國志の魏志卷十五の張既傳に、

張既與_二曹洪_一破_レ吳蘭於_二下辯_一、又與_二夏侯淵_一、宋建、別攻_二臨洮_一、狄道_一、平_レ之、是時太祖（曹操）徙_レ民以充_二河北・隴西・天水・南安_一、民相恐動、擾擾不_レ安、既假_二三郡人_一爲_二將吏_一者休_レ課、使_下治_二屋宇_一、作_中水碓_上、民心遂安、とあるものであつて、この「（張）既假_二三郡人_一爲_二將吏_一者」というのは、三郡（この三郡とは隴西・天水・南_一）（安の三郡を指すのであろう）の人で假りに一時的に將吏としたものとのことであり、この將吏というのは、唐律の捕亡律の將吏追_二捕罪人_一の條文の疏議に、

謂、見任武官爲_レ將、文官爲_レ吏、

と説明しており、現在職務についている武官や文官を言うのであるとしているが、商務印書館發行の辭源の將吏の所には、

軍官之通稱、〔尉繚子〕禁_レ行清_レ道、非_三將吏之符節_一、
不_レ得_三通行_一、

と説明し、軍關係の官吏の通稱であると言ひ、戰國時代の兵法の書と言われる尉繚子の例までも載せている。このように將吏については二つの解釋があるが、「軍官之通稱」と言うのが一般的な解釋のように思われる。宋代に現われる將吏衙前の場合の如きも、この軍官之通稱の意味のものである。しかしいづれにせよ將吏は官吏であり、公務員であるには相違がない。中國ではこのような公務員には力役が免除されるのであつて、これは周禮の施舍制度に基づくものである。施舍は力役を免除することであると、制度通・治具十三條・勸農或問が説明していることについては、先般の論文の註②に紹介してあるが、私も拙著『律令を中心とした日中關係史の研究』などに述べてある。施舍は周禮の所々に見えているが、その地官司徒篇の鄉大夫の職掌には、「其舍者、國中貴者・賢者・能者・服公事者・老者・疾者」とあり、貴者以下の階級のものが、力役免除の恩典に浴すとしている。この中の貴者とか服公事者というのが公務員のことであるが、公務員とか有品爵者・有德

行者・學者・學生・僧侶道士・科舉及第者・老人子供・不具廢疾者などは、この施舍制度の適用を受けて、清朝の滅亡に至るまで、いつの時代でも力役は免除されたのである。これは中國の身分法上の鐵則である。このように力役は免除されるが租税は免除されなかつたのである。今、張既も、三郡のものを假りに一時的な公務員の將吏にして、それに對して「休_レ課、使_下治_三屋宅_一、作_中水碓_上」ということを行つたとある。課を休ませて屋宅を修治し、水碓を作らせたというのであつて、この場合の課は、力役を意味しているのは、極めて明瞭である。三郡の民を一時的な公務員にして、それによつて公務員の特權たる力役免除の權利を一時的に取得せしめ、この力役免除によつて生ずる勞働力の餘裕によつて、屋宅を修治したり水碓を作らしめたというのである。課には税などの意味は絶對になく、また三國の屯田が變じて晉の課田になるといふような意味もそこには存在しない。故に伊藤長胤などの先哲は、課を税などと解釋しないのであり、また加藤繁博士もその著『支那經濟史概説』の第三章土地制度の所で「晉の武帝は、三代の古制を恢復せんと欲し、戸主たる男子には田七十畝を占せ

しめ、其の妻には三十畝を占せしめ、云云」と言われ、晉の武帝が創めた占田・課田法は、夏、殷、周三代の時に行われた井田法の復活であるとされている。

四 戸曹司戸參軍と井田法

先般の論文では、大唐六典卷三戸部篇にある戸部尙書・侍郎の職掌に、井田の政令ということが見えていることや、舊唐書卷四十三職官志の戸部尙書の所には、その戸部郎中・員外郎の職掌に、井田を分理するということが見えていることを紹介して置いたが、大唐六典には、もう一カ所矢張り井田の語が見えているのである。それは同書卷三十の三府督護州縣官篇にあるところの京兆・河南・太原牧及び都督刺史の下に置かれて管下の戸籍・計帳・道路・逆旅・田疇・六畜・過所・錮符や訴競などを掌る官たる戸曹司戸參軍の職掌にも、

凡井田利害之宜、必止其爭訟、以從其順、と述べてあって、井田と言って均田とは言っていないのである。このように大唐六典には、二カ所も當時行われていた土地法を井田で表現しているほどであるから、全篇中ど

こにも均田という文字は用いられておらない。これは當時の同じ官撰の書である唐律疏議も同様であって、唐律疏議にはどこにも均田の文字は見えないのである。

追記 私はこの論文の第三項の所で、三國志張既傳に課が力役の意味に用いられていることを紹介したが、三國志より以前の漢書にも、課が仕事とか、職務の意味に用いられている例があるを後に知った。それは漢書卷八宣帝本紀の黃龍元年二月の條に、「(宣帝)詔曰、(上略)今吏或以不_レ禁姦邪爲_二寬大_一、(中略)上計簿、具文而已、務爲_二欺誑_一、以_二辟其課_一、(下略)」とあり、この以_二辟其課_一の課は、官吏の仕事、職務、職責を意味しているのは、極めて明瞭である。このような解釋は、わが令義解にも見えている。即ち職員令式部省の條文にある「考課」に對して、義解は「謂、考書、考校也、課者、諸司職掌所課之庶事也」と述べているが、その他、簡野道明氏の字源も、課について「仕事をそれぞれわりあてる。又、其の仕事」と説明し、諸橋轍次博士の大漢和辭典も課の所で「しごと、つとめ」という意味のあることを述べている。いずれも課には、仕事という意味もあることを述べているが、その仕事が上より強制されると力役となるのであり、仕事の課が變じて力役の課となるのである。尙お課に仕事の意味があるとする解釋は、日本の辭書に見えるのであって、中國の辭源や辭海や康熙字典には見えない。(校正に際して追記す)